

第二回報告書巻頭言

2003年イラク戦争開戦の大義であったフセイン政権による大量破壊兵器の保持また隠蔽という理由が、欺瞞であったことが明らかになりつつある。開戦以後、執拗な探索をへてもその種の兵器が見つからないばかりではない。開戦から10ヶ月後となる2004年1月28日、大量破壊兵器の捜査に当たるアメリカ調査団長ディヴィッド・ケイ氏は合衆国議会において、イラク政府が大量破壊兵器を保有したという情報自体がそもそも誤りであったと語った。もしこのケイ氏の指摘が正しければ、いったい誰がイラク政府は大量破壊兵器を所持すると喧伝したのか。根本における情報操作の疑惑が検証されねばならないであろう。さらに、その種の情報操作に直接かかわったか否かは別として、虚偽の大義を掲げて戦争に踏み出した国家指導者のしかるべき「戦争責任」が、大きな問題として問われねばならないであろう。

戦争を国家目標を追求する一手段とみなすような19世紀までの論理を退け、無告の多くの民衆を巻き込む戦争の犯罪性を「平和」と「人類」という視点から告発しようとする理念は、20世紀に入り登場した思想であった。とりわけナチスの蛮行がその種の平和論と人類的思想に新しい視点を拓いたといつてよい。第二次世界大戦中から芽生え、戦後、対ドイツ・ニュルンベルク裁判において判断根拠となった「平和に対する罪」および「人道に対する罪」の法理は、たしかに勝者の論理という側面を持ったとしても、人類にとって辛い経験を糧に広い承認を得た国際概念である。しかし、それらの罪が、大国指導者の行為には免罪されるのであれば、二つはいかなる点でも法理たる意味を持たない。人類はこれまでもしばしばその種の危険に直面したが、今日もまた二つの法理を大国の圧力のゆえにあっけなく放棄するか、それとも改めてその確認をめざすかの岐路に立っているように思える。

実際のところ国際政治上の力関係からいえば、合衆国指導者に対して二つの法理を法廷の場で問うことは難しいことであろう。しかし、だからといって今日の世界に何の手だてもないわけではない。たとえば、われわれは2004年11月に行われるアメリカ合衆国大統領選挙に注目する

ことができる。結果はブッシュ大統領の当落という程度に終わるかもしれないが、選挙の帰趨を通して合衆国国民自身が、国際的法理あるいは倫理の再構築に向けた独自の一步を踏み出すことが出来るかもしれない。あえていえばわれわれ自身も地球市民として、その再構築の意義を合衆国市民に対して語りかけ、問題を共に、人類社会が直面する今日の課題として考える必要があるのではないか。

グローバル化時代は、国際社会なる場を従来にもまして明確に意識させる点で国境を越えた新しい政治のあり方、とりわけその政治に不可欠な市民意識と、それを支える文化・倫理規範の共有可能性を人類に対して問うているように見える。そのような時代における人文学の課題は、人類文化が歴史的に育んできた多様性とその意義の確認をめざすと共に、他方では、国際化しつつある政治・社会・文化のあり方に対して意味ある結びつきを持ちうる、普遍的とはいわないまでも、幅広い共生への感受性を国・地方を越えて養うものでありたい。とくに世界がグローバル化、一体化という言葉で語られながら、実際には無秩序なまでに無法がはびこり、残忍な殺戮行為や戦争行為が瞬時にして世界的に広がるほどの危機的状況にあればなおさらである。危機は2001年9・11事件以降、間違いなく急迫しつつある。

第二回報告書の構成について記す。

本巻は、京都大学大学院文学研究科21世紀COEプログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」の2003年度活動報告書として編むものである。プログラムとしては昨年10月刊行報告書に続くという意味で、第二回となる。ちなみにこの第二回報告書は本巻を第1分冊として5巻（歴史篇、哲学篇2分冊、文学篇1、文学篇2 翻訳・注釈）からなり、全巻について『人文知の新たな総合に向けて』という第一回報告書タイトルを引き継いでいる。

5巻の報告書の構成は、本プログラムのもとで現在組織される13の研究班活動を基礎に各章を構成し、論文等を配列することを原則とした。研究班で中心的役割をはたす京都大学文学研究科教員ばかりか、活動に協力する他大学教員・外国人研究者、また若手研究者・大学院生の論稿をも積極的に掲載することで、本プログラムの活動状況を包括的に提示するよう工夫している。掲載論文の中には、若手研究者の国際学界デビューを手助けするものとして、邦文論文を外国語に訳出することを支援

した、語学指導成果としての論文も含まれている。若手研究者育成プロジェクトの一環である。

なお第二回報告書はこの5巻に加えて4つの別冊をもつ。いずれも本プログラム各班ごとの成果であり、タイトルのみを以下に記す。『絵図・地図からみた世界像』(「15・16・17世紀成立の絵図・地図と世界観」研究班)、『安祥寺の研究 京都市山科区所在の平安時代初期の山林寺院』(「王権とモニュメント」研究班)、*Rembrandt: Papers Given at a Colloquium in Graduate School of Letters, Kyoto University, December 15, 2002* (「規範性と多元性の歴史的諸相」研究班)、『ACADEMICA 学と規範と制度』(同上研究班)。また昨年12月に開催した国際シンポジウムの内容を報告書『文学と言語にみる異文化意識』として同時に刊行する。

以上、第二回報告書は多岐に及ぶが、それぞれについてわれわれなりに精魂を傾けたものである。おのおのの内容が本プログラムの目的である我が国人文科学研究・教育の高度化、世界的拠点の形成に寄与するものであることをせつに願っている。

2004年2月

グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成
拠点リーダー
京都大学大学院文学研究科教授
紀平 英作